

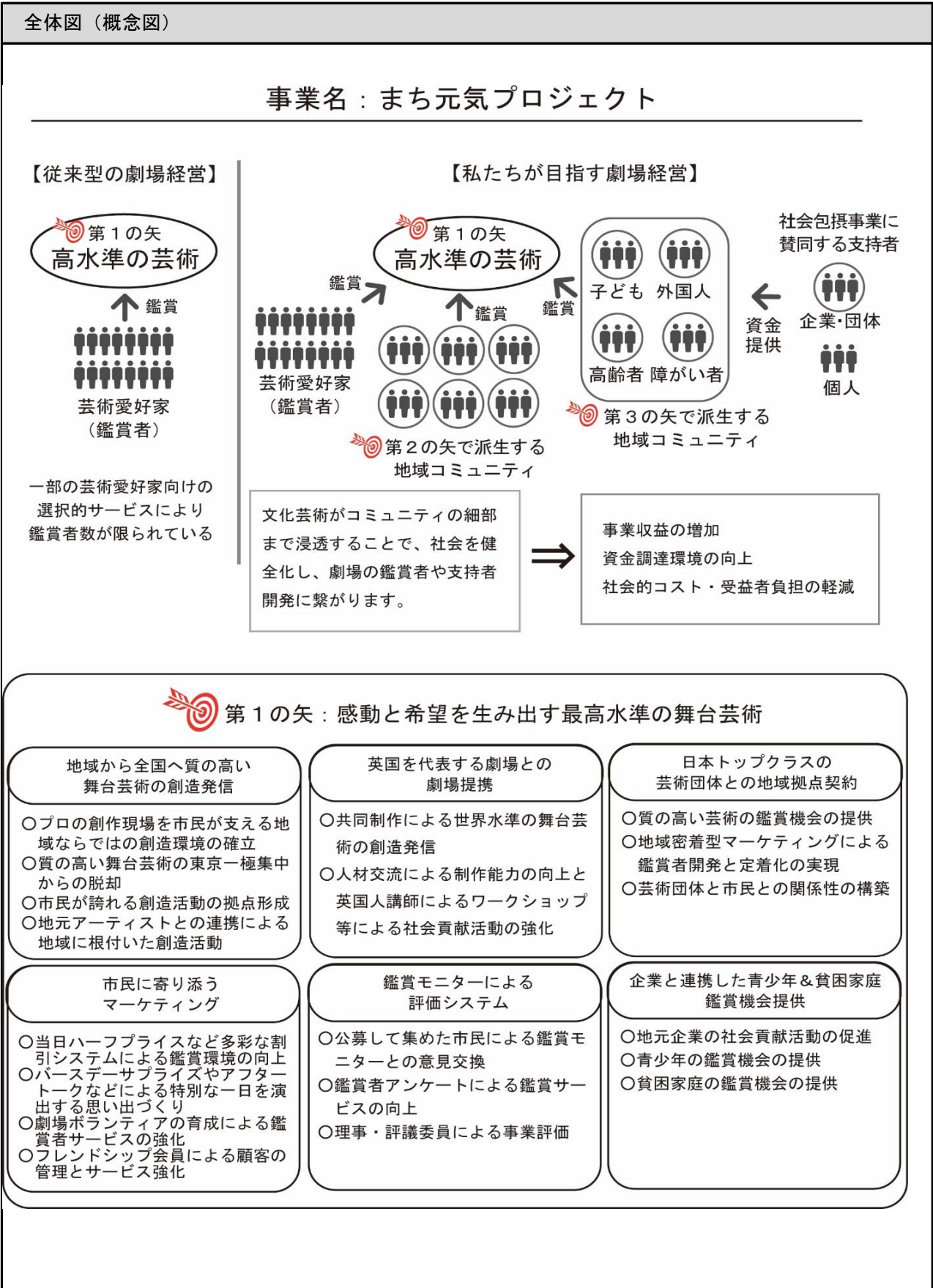
平成30年度劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(劇場・音楽堂等機能強化総合支援事業)

自己点検報告書

団 体 名	公益財団法人 可児市文化芸術振興財団
施 設 名	可児市文化創造センター
助成対象活動名	まち元気プロジェクト
助 成 期 間	5 (年間)
内 定 額	35,134 (千円)

事業概要

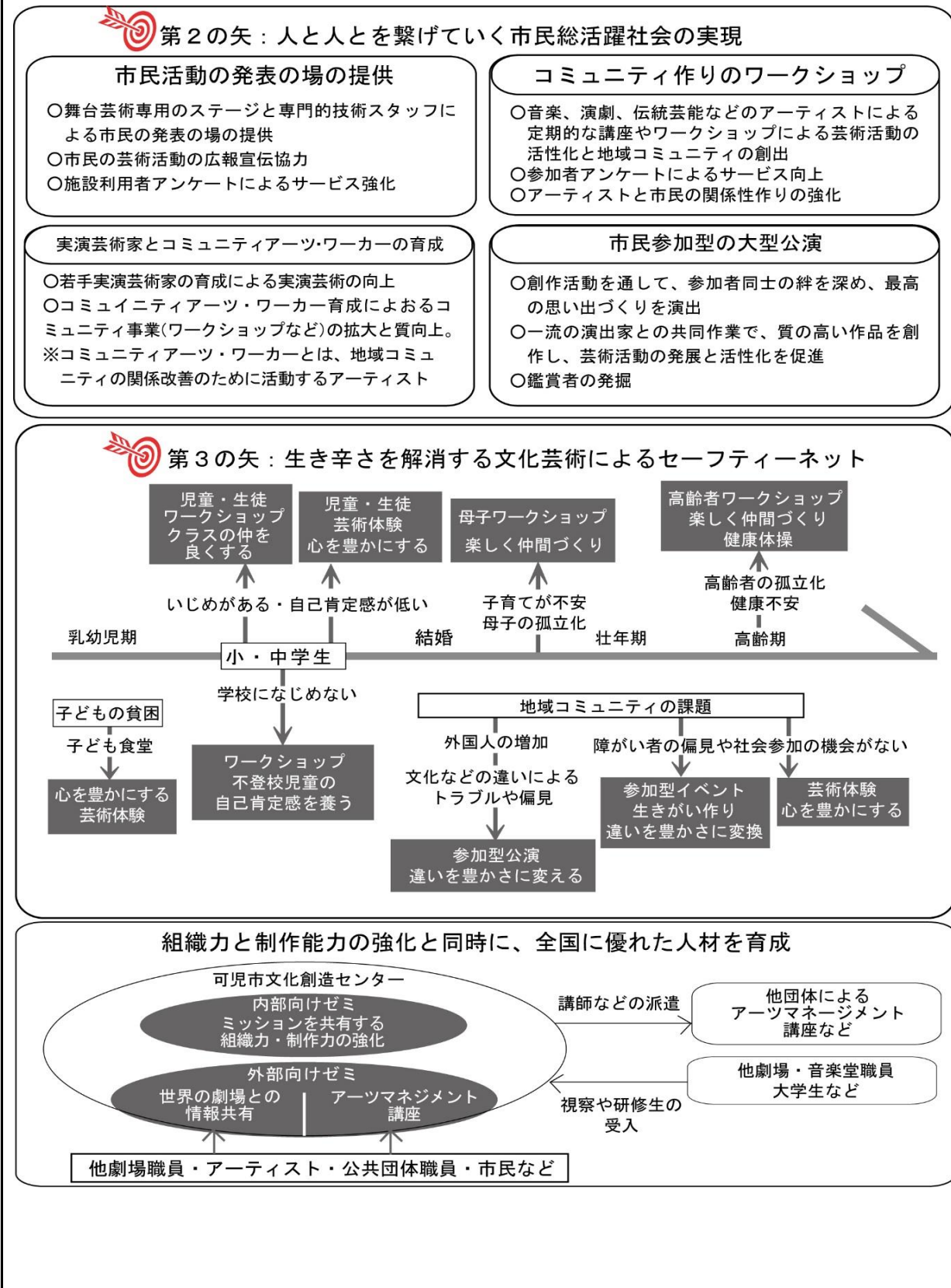
(1) 事業計画の概要



事業概要

(1) 事業計画の概要

全体図（概念図）



(2) 平成30年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	オーケストラで踊ろう!	2019年3月2日、3日	演目: オーケストラで踊ろう! 出演: 公募による市民ダンサー49名 演奏: 可児交響楽団(市民オーケストラ) 振付、演出: 近藤良平(ダンサー、コンドルズ主宰)	目標値	1,073
		可児市文化創造センター・主劇場		実績値	市民ダンサー49人、市民オーケストラ65人、入場者数833人
2	新日本フィルハーモニー交響楽団 サマー・コンサート2018	2018年7月29日	プログラム: ラフマニノフ/ピアノ協奏曲第2番ハ短調Op. 18 指揮: 上岡敏之(新日本フィルハーモニー交響楽団音楽監督) ピアノ: オルガ・シェプス 管弦楽: 新日本フィルハーモニー交響楽団	目標値	750
		可児市文化創造センター・主劇場		実績値	771人
3	文学座公演 「かのような私—或いは斎藤平の一生—」	2018年9月27日、28日	作: 古川健(劇作家・俳優、劇団チョコレートケーキ所属) 演出: 高橋正徳(演出家、劇団文学座所属) 出演: 関輝雄、川辺邦弘、亀田佳明ほか	目標値	480
		可児市文化創造センター・小劇場		実績値	446人
4	シリーズ恋文 vol. 9	2018年11月24日、25日	演目: トランプが全部揃ったら、傍らの妻へ、ほか 出演者: 石丸謙二郎、市毛良枝 音楽・ピアノ演奏: 黒木由香 演出: 詩森ろば(seriarunumber主宰)	目標値	500
		可児市文化創造センター・小劇場		実績値	394人
5	多文化共生プロジェクト2018	2019年2月11日	演出: 鹿目由紀(劇団あおきりみかん) 出演: 14人(ブラジル7人、ペルー1人、日本5人) サポーター: 4人(ブラジル1人、日本3人)	目標値	80
		可児市文化創造センター・演劇練習室		実績値	90人
6	森山威男ジャズナイト2018	2018年9月15日	曲目: Birth of Life、East Plantsほか 出演: 森山威男(ds)、渡辺ファイアー(as)、川嶋哲郎(ts)、佐藤芳明(acc)、田中正直(p)、水谷浩章(b)、相川瞳(per)、類家心平(tp)	目標値	750
		可児市文化創造センター・主劇場		実績値	680人
7	ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団 ニューイヤー・コンサート2019	2019年1月7日	演目: オペレッタ「美しきガラテア」ほか ソリスト: アナ・マリア・ラビン(ソプラノ)、トマス・ブロンデル(テノール)、舞踏: アンサンブルSV0ウィーン・メンバー 指揮: アレクサンダー・ジョエル、管弦楽: ウィーン・フォルクスオーパー交響楽団	目標値	800
		可児市文化創造センター・主劇場		実績値	794人
8	新日本フィルハーモニー交響楽団メンバーによるオープン・シアター・コンサート	2018年6月14日	プログラム: モーツァルト/アイネ・クライネ・ナハトムジークほか スタッフ: 西江辰郎、田村直貴(ヴァイオリン)、原孝明(ヴァイオラ)、飯島哲蔵(チェロ)ほか	目標値	800
		可児市文化創造センター・主劇場		実績値	710人
9	文学座俳優による子ども向け舞台「三匹のこぶた」	2018年8月25日、26日	演出・音楽・出演: 鈴木亜希子、吉野実紗、相川春樹(俳優、文学座) 美術・演出協力: 乗峯雅寛(舞台美術家、文学座)	目標値	120
		可児市文化創造センター・演劇練習室		実績値	入場者数185人 参加者数22人
10	平田オリザの「対話を考える」ワークショップ	2018年8月3日	カリキュラム: 「(生徒の)参加を促す」 ~声を出す・動く・集まる 講師: 平田オリザ(劇作家、演出家、青年団主宰)	目標値	30
		可児市文化創造センター・レセプションホール		実績値	13人
11	森山威男ドラム道場	毎週月曜日	講師: 森山威男(ジャズドラマー)	目標値	300
		可児市文化創造センター・音楽ロフトほか		実績値	265人
12	アキラ未来の演奏家プロジェクト	2018年6月21日、22日、24日	プログラム: J.S. パッサ/無伴奏フルトのためのパルティータ短調BWV1013ほか 出演者: 渡久地圭(フルト)、大橋春奈(ピアノ)、佐野秀典(作曲・編曲家)	目標値	900
		可児市文化創造センター、市内小学校2校		実績値	入場者118名 参加者913名
13	劇場フロントスタッフ研修	2018年7月16日、8月4日、10月28日	内容: 座学、実地研修 講師: 星乃もと子(Theatre Management Plan Co., Ltd. 代表)	目標値	100
		可児市文化創造センター・音楽ロフト、主劇場		実績値	95人
14	劇場に関わる人のためのアーツマーケティング・ゼミ「あーとま塾2018」	2018年5月24日、25日、10月10日、11日、2019年1月30日、31日	テーマ: 文化政策、社会包摂、マーケティング ゲスト: 大江耕太郎(文化庁文化活動振興室長)、幸地正樹(ケイスリー代表取締役)、湯浅誠(法政大学教授)、セラ・ジー(インディゴ社業務執行役員)、竹田亨(日本航空機地域活性化推進部長)	目標値	30
		可児市文化創造センター・音楽ロフトほか		実績値	114人
15	歌舞伎とおしゃべりの会	2018年5月~12月	講師: 中村橋吾(歌舞伎役者)、吉田豊(岐阜県芸術文化会議名誉顧問)、葛西聖司(古典芸能解説者)、中村萬太郎(歌舞伎役者)、川瀬露秋(地歌箏曲胡弓演奏家)、鶴澤都賀寿(義太夫三味線)	目標値	400
		可児市文化創造センター・映像シアター		実績値	375人

(2) 平成30年度実施事業一覧

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
16	新日本フィルハーモニー交響楽団おでかけコンサート	2018年6月12日、13日、15日、18日、19日	プログラム：ポロディン/弦楽四重奏曲第2番ニ長調より第1楽章、ハチャトゥリアンほか スタッフ：西江辰郎、田村直貴（ヴァイオリン）、原孝明（ヴィオラ）、飯島哲蔵（チェロ）、柴原誠・齋藤祥子・牧野美沙（パーカッション）	目標値	400
		市内小中学校4校		実績値	357人
17	文学座おでかけ朗読会「父母への手紙」	2018年7月3日～6日	プログラム：「ただいま、おかえり」「愛すべき二人の母上様」「細い小さな大黒柱」「娘を返してくれ」 出演：山崎美貴（俳優、文学座）	目標値	1,000
		市内小中学校3校		実績値	483人
18	町が元気になる処方箋	2018年8月3日	テーマ：「生きづらさ、生きにくさ」を考える-新しい広場としての劇場の可能性- ゲスト：平田オリザ（劇作家・演出家）、森川すいめい（精神科医）	目標値	50
		可児市文化創造センター・映像シアター		実績値	56人
19	みんなのディスコ	2018年6月23日	スタッフ：N.O.D.A. summer (DJ)、蛭名佳 (DJ)、ryosei (DJ)	目標値	150
		可児市文化創造センター・演劇ロフト		実績値	95人
20	ココロとカラダワークショップ	2018年4月～12月	内容：親子de仲間づくりワークショップ（乳幼児の親子対象）、ココロとカラダの健康ひろば（高齢者対象） 講師：新井英夫（ダンスアーティスト）、Ten seeds（劇・遊び・表現活動）	目標値	1,236
		可児市文化創造センター・レセプションホール		実績値	1,028人
21	世界劇場会議国際フォーラム2019 in 可児	2019年2月7日、8日	内容：劇場は社会に何ができるか、社会は劇場に何を求めているか ゲスト：湯浅誠（法政大学教授）、熊井一記（KAAT神奈川芸術劇場制作課係長）、ルース・ブロック（ジャクソビア・スクール 財団代表理事）	目標値	120
		可児市文化創造センター・小劇場		実績値	82人
22	英国人講師による学校ワークショップ	2019年1月13日～18日	講師：Amy Lancelot（リーズ・プレイハウス） アシスタント：山田久子、清水万里子、かにつこ英語サポーター、ALT	目標値	300
		可児市子育て健康プラザ マーノほか		実績値	268人
23	親子で楽しむワークショップ	2018年11月18日	講師：西川信廣（演出家、文学座） アシスタント：浅海彩子、佐藤麻衣子（俳優、文学座）	目標値	20
		可児市子育て健康プラザ マーノ		実績値	16人
24	バリアフリー対応			目標値	
				実績値	
25	多言語対応			目標値	
				実績値	
平成30年度の目標値、実績値				目標値	10,389
				実績値	9,317

【妥当性】

自己評価

事業計画に必要な構成要素が関連し、当初の予定通りに事業が進められているか。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

まち元気プロジェクトでは、従来型の劇場経営である舞台芸術の鑑賞事業以外にも、鑑賞者開発や、文化芸術を用いて地域コミュニティの繋がりを深める事業に取り組んでいる。

この事業では、住民の孤立化の緩和や、人と人の繋がりによる地域社会の活性化をアウトカムに位置付けている。メインとなるステークホルダーは外国籍住民・ひとり親家庭・高齢者・障がい者・乳幼児を持つ親などで、目標としてはこれら住民の共生や仲間づくりを設定している。可児市は住民の高齢化が進んでいる他、外国にルーツを持つ住民が多く住んでおり、大きな割合を占めるこれらの住民が生きがいを持ち安心して暮らせることは地域の重要なニーズである。

また文化芸術の持つ力を最大限に活用することで、これらの人たちが感じている生き辛さを解消するセーフティネットとなることも目標にしている。周りに子育ての悩みを相談できる相手がおらず、子育てにストレスを感じている親にはコミュニケーションワークショップを通じて仲間づくりを行ったり、外出する機会が減って孤独を感じたり健康不安を抱えている高齢者には、ワークショップをはじめとした劇場に関わることで楽しさや生きがいを持っていただくという事業を展開している。可児市文化芸術振興財団は、多種多様に渡るワークショップやアウトリーチなどを以前から実施している。これによって年齢や家庭環境など様々な状況の住民が、何らかの形で劇場に関わることのできる仕組みを作り上げることができており、劇場が地域の社会機関としての役割を持つための強みとなっている。

また当財団ではこれらの対象者や課題を一括りにせず、それぞれに対してどのようなアプローチをすることで社会課題の解決に役立てるか熟考し、事業を実施している。

一例として、多文化共生プロジェクトでは、外国にルーツを持つ住民と日本国籍の住民が交流する場となっている。外国籍の子ども達は言語や文化の壁だけでなく、経済的な課題を抱えていることが多く、地域において孤立しやすい傾向が見受けられる。演劇など文化芸術を介して外国籍と日本国籍の住民が関わることで、お互いを地域の一員として認め合い、多国籍間の仲間づくりに繋がっている。また平成30年度はドキュメンタリー演劇の手法を採り、参加した市民が抱えている悩みを語り合う演出を行った。同じ地域に暮らしながらその生活がどのようなものかよく知らないというのは外国籍と日本国籍の人が抱える課題であるが、公演で彼らの悩みを聞くことで、出演者・観客がお互いを身近に感じ、隣人として共生する意識を醸成した。

当財団では地域で活動する様々な団体と連携し、お互いの強みを活かして事業の効果を高めている。多文化共生では国際交流協会、一人親家庭の親子は母子寡婦福祉連合会、小中学生対象は市教育委員会などが該当する。これらの団体と連携することで対象者にアプローチしやすくなる他、現場の状況を知ることができたり、対象者がどういったことを必要としているのか確認できる。団体にとっても劇場という専門外の人間と関わることで、改めて対象者との関わり方などの気付きを得ることも多い。当財団だからこそ提供できる事業・アウトリーチを体感できることも、団体側にとって大きなメリットである。

事業のアウトカムは、施設利用者数や事業参加者数、事業参加者のアンケートの満足度で効果を確認している。また一部のワークショップ事業では、市と協力して社会的投資収益率（SROI）を算出し、客観的な指標を用いた測定に取り組んだ。高齢者を対象にしたワークショップではSROI値3.47（1,081,500円の予算に対して3,784,526円の社会的投資効果）、ひとり親家庭を対象したものは1.76、乳幼児とその親を対象にしたものは1.46と、それぞれ経済的な投資効果が認められることを確認した。

【有効性】

自己評価

目標が達成し、アウトカムの発現は可能か。

まち元気プロジェクトでは、事業に応じて定性的・定量的な測定方法によりアウトカムの発現を確認している。

定性的な測定方法としてはアンケートによる満足度調査などがあり、満足度以外にも実際に事業に参加した人の声を事業の改善に活かしている。

定量的な調査としては実績数値などがある。測定結果としては、公演事業入場者が36290人（3年間平均）、事業収入が9935万円（3年間平均）、主催公演の開催数665回となった。また乳幼児や保護者の参加しやすい公演は4回開催（目標値4回以上）、障がい者が参加しやすいバリアフリー事業は3回開催（目標値3回）を達成し、障がいの有無に関わらず文化を楽しめる環境づくり、乳幼児を持つ親の孤立化防止などの目標達成に大きな効果があった。

また客観的な指標として、ひとり親家庭、乳幼児と保護者、高齢者を対象にしたワークショップで、可児市と協力して社会的投資収益率（SROI）を用いた測定を行った。ひとり親家庭はSROI値1.76（支出額に対して1.76倍の投資効果がある）、乳幼児は1.46、高齢者は3.47となり、経済的な投資効果が認められることを確認した。

事業のアウトカム・目標の達成においては、地域資源である各種関係機関との連携を重視している。外国籍住民との多文化共生においては国際交流協会、ひとり親家庭の孤立化防止と文化芸術体験では母子寡婦福祉連合会などが該当する。これらの機関は日常的に対象者と関わっており、対象者の状況を把握している他、事業の案内窓口となってもらうことで、より多くの参加者が見込める。一方で文化芸術を活用したアプローチは苦手としており、当財団が事業を実施することで、関係機関の活動にもバリエーションが生まれる。今後も継続的に協力し、お互いの強みを生かしていく体制を構築していく。

【効率性】

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んでいるか。

補助金の対象となる事業は23件あり、いずれも年度内を事業期間として設定し、全ての事業を期間内に実施・完了した。「オーケストラで踊ろう！（大型市民参加事業）」など、大規模かつ期間の長い事業もあったが、当初の計画どおりに完了した。

また個々の事業を期間内に実施するだけでなく、複数の事業を有機的に関わらせることができた。「あーとま塾」と「世界劇場会議国際フォーラム」では、地域に対して劇場がどのような役割を果たせるかというテーマは同じだが、参加者が現場の課題も含めて直接議論するゼミと、外国や企業などの先進事例を学ぶ講演会とでアプローチの方法を変えた。両事業に参加することでより深い理解に役立つようになり、両事業に参加する人が増えた。

このように事業の内容や目的に合わせて期間を設定し、いずれも期間内に実施・完了するなど、事業期間の設定は適切であった。

収支においては、当初予算比べて製作費が減少した。主な事業は「オーケストラで踊ろう！」で、約200万円減少した。主な理由は衣装美術費の見直しである。制作内容を詰めていく中で、出演者の衣装を市民サポーターや出演者自身が制作することになり、美術スタッフを立てなくなったために減額となった。当初の事業案とは違う形となったが、出演者が衣装制作にも携わることで、自分たちで作り上げる公演という意識を高めることに繋がった。

「オーケストラで踊ろう！」は市民自身が出演者となるため、作品の完成度を高めることと並んで、稽古や公演を通じて市民が事業に参加して良かったと感じられることを大切な要素と考えている。文化芸術に関わった体験の満足度が高いほど、未来の鑑賞者または劇場に関わる市民を育てることに繋がるためである。事業費は削減したが、参加者が作品に一層深く関わることで、満足度を高めることができた。

【創造性】

自己評価

事業計画の内容が、独創性、新規性、先導性等に優れている（と認められる）か。

事業の実施によって、当該劇場・音楽堂等の国内外での評価の向上につながっている（と認められる）か。

まち元気プロジェクトの事業計画において、可児市文化芸術振興財団は3つの大目標を立てている。「最高水準の舞台芸術を提供する」「人と人を繋げ、市民が活躍できる社会を実現する」「文化芸術により生きづらさを解消するセーフティネットを構築する」である。

当財団の事業計画が独創性、新規性、先導性に優れているのは、通常の劇場が目指す「最高水準の舞台芸術の提供」に留まらず、文化芸術による効果・恩恵の対象を鑑賞者以外の市民に広げている点である。

独創性、先導性等を發揮するためのキーパーソンが、館長兼劇場総監督の衛紀生である。芸術文化振興基金運営委員会委員、地域文化・文化団体活動部会部会長などを務め、十数地域の自治体文化行政に関わるなど、芸術文化の分野に留まらず活躍の場を広げている。平成28年度には芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）を受賞した。朝日・日本経済・中日・岐阜・愛知保険医など各種新聞をはじめ週刊女性など様々なメディアに取り上げられており、メディアを見た団体や自治体、個人からの問い合わせも多い。全国に財団の活動を広く知らしめる旗手となっている。

また事業の独創性、先導性等に欠かせないのが提携団体である。当財団はそれぞれ高水準な芸術性と多くの多様な人材を持つ、文学座と新日本フィルハーモニー交響楽団の2団体と地域拠点契約を結んでいる。これにより公演だけでなく、ワークショップや学校・福祉施設に出向くアウトリーチなど、質の高い様々な活動を地域に提供している。

財団では他にも事業の目的や対象者に合わせ、国際交流協会や母子寡婦福祉連合会など地域で活動する団体と連携している。

また独創性の高い点として、障がい者や乳幼児、小中学生など劇場に足を運ぶことが難しい層をターゲットにしている。劇場で鑑賞を楽しむ体験を持ってもらうことで「人と人を繋げ、市民が活躍できる社会を実現する」「文化芸術により生きづらさを解消するセーフティネットを構築する」という大目標の実現を進めている。これらの事業を柔軟に提供できるのも、当財団の理念を理解している団体の協力があったことである。

また、まち元気プロジェクトでは、事業の目的に合わせて独創性、先導性を高めることのできる講師やスタッフを選出している。

乳幼児とその親、高齢者を対象にするワークショップでは、ダンスアーティストの新井英夫、劇・あそび・表現活動のTen seedsが講師である。いずれもダンス・演劇の分野で優れたスキルを有しているだけでなく、ワークショップで参加者が気持ちよく過ごせるように整えるコーディネーターとして高い能力を有している。例えばワークショップの初回時は参加者も内容を把握しておらず、他の参加者とも打ち解けていない状況で、十分にワークショップを楽しめる状態ではない。そのような場面で、新井英夫やTen seedsは楽器などの音や動き、会話を効果的に使い、お互いの専門分野であるダンスと演劇を組み合わせることで参加者の緊張を解きほぐすことができる。このように当財団の社会包摂に関する事業では、自身の技術を披露するよりも、参加者の緊張や生きづらさに寄り添うことのできる講師を採用しており、特にこの点が参加者から高い評価を得られている。

また事業の戦略として、複数の事業に市民の関わっていく仕組みがある。当財団では、ワークショップに参加した人が表現する楽しさを覚え、他のワークショップに参加する事例が多く見られる。また当人だけでなくその子どもが市民演劇事業に参加し、親がサポーターとして活躍する例もあるなど、どの年齢層も劇場を中心に关わる仕組みを構築している。事業への参加は公演などの鑑賞者開発にも繋がっており、演劇や古典芸能、クラシックなどそれまで当人の観たことのなかった分野にも興味を持つきっかけとなっている。

【持続性】

自己評価

事業計画を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。
持続的なアウトカムの発現・定着が期待できるか。

当財団では、持続的にアウトカムが発現できるよう取り組んでいる。

まち元気プロジェクトを展開することで、鑑賞施設ではなく地域における社会機関としての役割を拡大し、まちの課題解決を行っている。当財団ではどの年齢層でも関わりの持てる事業を多く実施しており、事業に参加することで参加者同士、参加者とスタッフなど人と人のつながりが密接なものになっていく。このような参加者が中心となって他の参加者を盛り上げたり、自発的に仲間づくりを進めたりすることで、当財団もしくは地域全体の活動を持続的に拡大している。

一方で学校向けのワークショップや各種事業を通じて教育機関との継続的なネットワークも形成している。児童生徒だけでなく、新任教師を対象にしたコミュニケーションワークショップも実施しており、子どもたちとの関わり方やクラスづくりに役立っている。教育機関にとってもよりメリットを実感できる事業を実施することで、持続的なネットワークづくりへの理解を深めてもらっている。

収益基盤に関しては、設置自治体から指定管理料を毎年4億5千万円受け取っている。

また外部資金の導入として、寄付も積極的に募っている。「私のあしながおじさんプロジェクト」では企業や個人からの寄付金を原資に、中高生にチケットをプレゼントしている。また「あしながおじさん for Family」では、就学援助や児童扶養手当を受けている子の家族にもチケットをプレゼントしている。これはただ文化芸術を鑑賞する機会を提供するのではなく、その体験を家族間のコミュニケーションのきっかけにしてほしいと考えてのことである。

同プロジェクトでは、利用者全員の感想を寄付者の元に届けている。寄付者は利用者の生の声を知り、自分の寄付金が有効に使われていることを実感できる。寄付者に対して丁寧に関わることで寄付者の満足度を高め、寄付件数・金額とも少しずつ増えている。